

# クリスティーナ・ロセッティの 「ゴブリン・マーケット」について

—資本主義とフェミニズムの観点から—

吉田 尚子

## はじめに

クリスティーナ・ロセッティ (Christina Georgina Rossetti, 1830-94) は詩人として生前は高い評価を得ていたが、彼女の死後はいつの間にか次第に顧みられなくなってしまった。イギリスの美術界に大きな足跡を残したラファエロ前派の創始者で、画家であり詩人でもあった兄のダンテ・ゲイブリエル・ロセッティ (Dante Gabriel Rossetti, 1828-82) の存在があまりに大きすぎて、彼女の影が薄くなったこともその一因であろう。しかし、1970年代の後半になって、フェミニズム批評が盛んになり、ヴィクトリア朝の女流詩人たちが注目を集め見直されるようになると、ロセッティの研究が本格的になり評価が高まってきた。彼女の詩の中で、最も有名で、人気のあった作品は「ゴブリン・マーケット」"Goblin Market" (1862) で、それが発表されると、たちまちのうちに評判になり当時の子どもたちはそれを読んで育ったと言われている。兄のウィリアム・マイケル・ロセッティ (William Michael Rossetti, 1829-1919) によると、ロセッティは「このお話には何も深い意味を持たせようとしたわけではない」と語っていたという。しかし、この詩には隠喩などによる象徴的寓意的な解釈が出来ることが多い。キリスト教的倫理的な解釈、フロイト、ユングなどの精神分析的な解釈など、色々な解釈の可能性がある。小論では当時のイギリス社会の背景と関連させて、フェミニズム的見地から「ゴブリン・マーケット」を考察したいと思う。

## 1. ヴィクトリア朝社会における女性の生き方

イギリスでは18世紀から19世紀にかけて、他国に先駆けていち早く産業革命が起こり、19世紀には言わばイギリスは「世界の工場」となって工業、商業、貿易が発展し、社会構造が大きく変動した時代だった。商工業の発展によって、多くの富を蓄積した新興市民階級が社会の中核にのし上がり、経済力をバックに大きな力を持つようになった。産業の発達によって都市に人口が集中するようになり、都市化が進んだ。その結果、農業や家内工業が衰退すると、女性は家庭内で果たしていた経済的な重要な役割を次第に失っていた。つまり、産業革命によって、従来の家庭

内産業は駆逐され、機械の発達や技術の発達、仕事の専門化、工場の設立などで、男性は外に出て仕事をし、女性は従来の家庭内産業の仕事からはなれて、家の中で、夫と子供の世話をして家庭を守ることが女性の務めになった。「男性は外に、女性は家庭に」というように性別による役割分担が明確になり、男性と女性の生活領域がはっきり、区別されるようになった。このような社会変革によって、女性たちの生活形態に大きな変化をもたらされた。特に新興市民階級の中流階級の女性にとって、立派な男性と結婚することがもっとも幸福な生き方だとされ、女性の理想像は「家庭の天使」として内助の功に専念することだった。女性は生まれつき身体が弱いと一般に信じられ、その神話は中流階級の女性を家に閉じ込め、男性と対等に仕事することを妨げた。結婚することが女性のもっとも幸福な生き方だとされた時代に未婚である女性は「余った女性」として、社会から多くの抑圧を受けた。19世紀の女性作家にはクリスティーナ・ロセッティ、シャーロット・ブロンテ (Charlotte Brontë, 1816-55)、エミリー・ブロンテ (Emily Brontë, 1818-48)、エミリー・ディッキンソン (Emily Dickinson, 1732-1808) など未婚の女性作家たちは同じような経験をしたのである。

イギリスでは1850年代と1860年代までに家父長制的に産業を支配することが顕著になった。つまり、ブルジョワ階級の男性たちは生産手段をコントロールし、労働者階級の男性たちは雇用マーケットを独占的に支配した。一方、中流階級の女性たちは家事と母親業に精出すように言われ、女性は母親としての社会的身分の価値は以前より安定したが、経済的な価値については、妻は夫と比べて減少し、夫と平等な関係ではなくなった。そして、下層階級の女性は工業化が進むにつれて、工場で働いて得る賃金は男性に比べて非常に低く、彼女たちは次第に貧民として目立つ存在になり、結局、都市化が進むにつれて、多くの女性は工場で安い賃金で搾取されるよりも、売春婦になったほうが利益になったので、売春婦となって身を持ち崩す女性が増加した。このようにして、次第に女性は社会の公的場からは消えていき、公の場は男性が占領し、女性は社会の表舞台からは陰を潜め、私的な領域で生きるようになった。

## 2. 資本主義の体現者としてのゴブリン

「ゴブリン・マーケット」は超自然的で、幻想的な長詩であり、ゴブリン (goblin) という一種の妖精が登場する。伝承によれば、goblin というのは、みにくい小人の鬼のことを意味し、抜け出すことが出来ないわなに人間を陥れると言われている。ロセッティは兄の率いるラファエロ前派の会員にはなれなかったが、若い男性の芸術家たちと交流することが出来たので、多くの刺激を受けたこともあり、彼女の作品にはラファエロ前派の絵と共通する所がある。まず、彼女の詩は絵画的であり、色彩の使い方や細部の精密な写実的な描写、さらに幻想的で夢のような不思議な雰囲気などは兄のゲイブリエルの絵と似ている。<sup>1</sup> この詩の中では、小人の形をした男のゴブリンたちは商人として、村の小川の反対側にある谷間を行ったり来たりして様々な種類の果

実を売っている。「ゴブリン・マーケット」を読むと、イグサや葦の茂っている小川がローラとリジーの姉妹たちとゴブリンたちのそれぞれの生活領域をはっきりと分け隔てる一つの境界線を成していることにすぐに気がつくが、この「イグサが茂っている小川」が大きな意味を持っていることは明らかである。というのはこの境界線を境にして、二つの対立するものが対照的に提示されているからである。旧約聖書、新約聖書の中では“brookside rushes” (33)<sup>2</sup> (イグサが茂っている小川) は誘惑や戦いなどを暗にほめかす象徴として出てくる。<sup>3</sup>

これらの対立するもののひとつは、ローラとリジーの姉妹の生活形態が象徴する従来の農業、家庭内産業の世界と果物売るゴブリンたちの生活形態が象徴する商業、産業、ひいては資本主義の世界の対立が示されている。この詩の題である“*Goblin Market*”が表しているように、ゴブリンたちは果物売って市場を開いているが、market という言葉はお金をもうけるとか、成功するなどのイメージを与える。当時、イギリスは産業革命によって工業、商業、貿易が栄えていた絶頂の時であった。ゴブリンが男性であることを考えると、これは当時のイギリス社会を象徴的に表したものである。つまり、ゴブリンである男性が産業に携わりお金をもうけ、女性がものを買うという当時のイギリス社会の図式が表されている。ゴブリンが売る果物は多種多様であり、国産のものだけではなく、輸入されたものもある。彼らは売る果物の名前をひとつひとつあげているが、その中で、berry と名のつく果物はイギリスの果物であるが、たとえば、“Citrons from the South” (27) (南国生まれのシトロン) などは南方からの輸入品であることがわかる。当時、イギリスは世界のいくつかの国を植民地にして多くの利益を得ていたが、この果物の種類の多さは世界を制覇していたイギリスの帝国主義を暗示していると考えられる。

このようなことから、イグサや葦の茂っている小川という境界線は一方に、農業社会や家庭内産業社会、他方に商業社会や資本主義社会というように資本主義以前の社会と資本主義社会という対立する社会を分け隔てていることがわかる。それと同時に農業で生きる女性の共同体と資本主義を担う男性の共同体をも分け隔てることを示している。すなわち、「ゴブリン・マーケット」はこのように女性と男性の生活領域の区分をもはっきり表した作品だと言える。

小川の一方の側では姉妹たちが住んで蜂蜜を集め、乳を搾るなど農業に携わる牧歌的な生活を送るといういわゆる田園詩のヒロインとして、姉妹が登場し、パストラル・ロマンスとなっている。そこでは家庭内産業や農業の仕事が商業資本主義によって侵されない領域を支配している。両親のいないローラとリジーの二人の姉妹は、強い愛情の絆で結ばれていて、二人で仲良く暮らしている。

Cheek to cheek and breast to breast

Lock'd together in one nest.

Early in the morning

When the first cock crow'd his warning,  
 Neat like bees, as sweet and busy,  
 Laura rose with Lizzie:  
 Fetch'd in honey, milk'd the cows,  
 Air'd and set to rights the house,  
 Knead'd cakes of whitest wheat,  
 Cakes for dainty mouths to eat,  
 Next churn'd butter, whipp'd up cream,  
 Fed their poultry, sat and sew'd; (197-208)

しかし、ある時、朝な夕なに小川の向こう側の谷間からゴブリンたちが“Come buy our orchard fruits, come buy, come buy” (3-4) と叫んで、ありとあらゆる様々な果物を魅力的な言葉を並べて、たくみに姉妹に買わそうとする声が聞こえてくる。イグサの茂っている小川に来たローラトリジーはゴブリンたちの間近に来たので、心穏やかではなかった。当時の一般的なアメリカとイギリスの婦人雑誌などでは若い女性たちは男性の活動している市場に不必要に行かないように忠告している。ヴィクトリア時代の上流、中流階級の女性は通りをひとりでうろつかない、散歩や旅にひとりで出かけないなど公的な場所には出かけないようにと教えられていた。これは男性が女性の活動を制約しようとした思惑からのものであった。というのは男性主導のもとで、資本主義を円滑に発展させるためにこのことが必要だったが、現実には女性からは精神的及び身体的な成長と発展に必要な条件を奪うことになった。産業主義が勃興して、それを発展させるために女性を経済的政治的活動の中心から排除しようとして、女性と男性の領域を分離させて、女性を公の場に出させないようにしたと女性運動の急進派たちは19世紀の後半に指摘していた。<sup>4</sup>

ローラトリジーはゴブリンたちのマーケットの近くに来た時に、性格の違いから異なる反応を示す。初めは、ローラはむしろ、機械的にゴブリンたちを見たら駄目だとトリジーと自分に言い聞かすように、村の人びとたちの言葉を繰り返している。理性ではそのように思っても好奇心の強い彼女は自分の感情を抑えられず、その境界線の付近をあえてうろつこうとする。「うろつく」“linger”という言葉はロセッティが好む言葉で、境界の罅をさまようこと、つまり対立するものの間の罅をさまよう女性としてローラが描かれている。<sup>5</sup> 自分の感情をコントロールすることが出来るトリジーはゴブリンの姿を見てはいけないうし、果物も買ってはいけないうし人から言われていたので、目も耳も閉ざして誘惑されないようにした。しかし、好奇心の強いローラは小川に茂っているイグサの間から、向こう側で果物を売る呼び声を出しているゴブリンたちを覗く。

Laura stretch'd her gleaming neck  
 Like a rush-imbedded swan,  
 Like a lily from the beck,  
 Like a moonlit poplar branch,  
 Like a vessel at the launch  
 When its last restraint is gone. (81-86)

家庭と農業経済の領域に閉じ込められていたローラはこのとき、この境界線を越えて別の領域に行ってしまうのである。彼女はゴブリン商人たちと果物の取引をし始めると、田園的環境から疎外されるようになる。谷間をうろつくゴブリンたちは女性を「性的な対象物」として、また「男性に隷属する者」として餌食にする。ゴブリンたちはローラを自分たちに隷属させるために、おいしそうで食べたくてたまらなくなるような果物で彼女を誘惑する。彼女は果物を買うためにお金がないので、自分の金色の髪を切って、果物と交換する。彼女は一度、果物を口にすると、その美味しさに夢中になり、いくらでも欲しがり飽きることはなかった。しかし、この果物を一度食べると、一層欲しくなりゴブリンたちにも恋焦がれて会いたくてたまらなくなるが、果物を再び食べることもゴブリンたちに会うことも出来なくなると言われていた。ジーニーという花嫁になることを夢見ていた村の少女が月夜にゴブリンたちと会って彼らから貰った果物を沢山食べたが、後で恋しくてたまらなくなったゴブリンにも二度と会えなかったし、食べたかった果物も二度と食べられずにやつれて、死んでいったという村の言い伝えがあった。欲望を一層かきたてるこの消えてなくなる果物とゴブリンは言わば、飽くことのない消費欲を起こすとマルクスが論じた資本主義の原理に似ている。ローラは自分の身体の一部である大事な金髪をゴブリンにやるが、アレグザンダー・ポープ (Alexander Pope, 1688-1744) の「髪盗み」(*The Rape of the Lock*, 1712, 1714) でも示されているように、そのことは性的な意味を持つ。つまり一般的に文学の伝統では髪を切って人にあげるということは処女を失うということの意味する。ローラはこの交換によって、人間性を失い、商業化されてしまい、買い手であると同時に売り手になった。つまり、彼女は消費者であると同時に、商品にもなったのである。

ロセッティは一見ありきたりに見える道徳話の中に、当時の社会批判を何げなく織り込んだのである。女性の領域が男性社会から分離されたことや女性の経済的価値の減少、都市化に伴う女性の性的な商品化などをもたらした資本主義社会を批判するために当時の産業システムによって、必然的に生まれた愛のない打算的な結婚やロマンスなどの空しさを描いたのである。その意味で、「ゴブリン・マーケット」は社会的抗議のコンテクストの中で読むべきであると Leder と Abbot は述べている。<sup>6</sup> これまで、ロセッティの批評家たちは彼女のキリスト教の精神的な関わり合いのみに関心が行き、詩人として彼女が伝えたかった社会的政治的メッセージを無視してき

たように思われる。彼女は兄のゲイブリエルを通して知り合ったバーバラ・リー・スミス (Barbara Leigh Smith, 1827-91) を始めとする当時の急進的な女性運動のグループであるランガム・プレース・グループ (Langham Place Group) の女性たちと交流があった。また彼女自身は英国国教会系の修道院の婦人更生施設 The Highgate House of Charity で、外部シスターとして働いていたこともあって、その反政府的で、議論好きな修道院からの影響も受けていたのである。これまでの批評家は彼女の宗教的な敬虔さばかりに注目して、彼女のこの二つの急進的な組織との結びつきを軽視していた。この二つの運動は女性の観点から、産業社会がもたらした物質主義を批判していたが、ロセッティも当時進行していた工業化は浅はかな誤った物質主義に人を陥れるもので、人間を精神的感情的に操作するものだと批判的な目で見ていた。そこで、彼女はこの作品の中で市場の文化をゴ布林という抑圧的な家父長的なイメージを通して描くことで、特に女性を抑圧する資本主義を批判したのだ。ジーニーのような墮落した女性は市場という資本主義社会では性的犠牲者として烙印を押され、上品な上流、中流階級の社会からは汚れた追放者として疎外される。この物語は資本主義のひとつの形態である市場の中で特に19世紀に起きていた女性を侵害するという悪夢として語られている。つまり資本主義社会では特に女性が物としてそしていつも満たされることのない消費者の両方として市場で二重の抑圧を受けていることに対してロセッティは鋭い批判を込めたのである。まず、第一段階として「ゴ布林・マーケット」は社会的歴史的次元において農業を営む女性社会が市場という男性支配の資本主義社会と出会ったことを描いた。そして、第二段階として、産業構造の変化によってローラ、リジー、ジーニーなどの町や村の多くの若い女性たちが社会的価値を引きずりおろされるという当時のヴィクトリア社会で女性たちが受けた抑圧の典型的な状況をロセッティは描いたのである。

### 3. フェミニズム的観点

ゴブリンの果物を食べた後、再び果物とゴ布林に接することができなくなったローラが果物とゴ布林たちに恋焦がれて、ものを食べるのが出来なくなり、衰弱して死にそうになっていくのをリジーは見て、彼女を救済しようと思い、ゴブリンのいる谷間に行って勇敢にもゴ布林と対決する。彼女はローラを救うためにゴ布林から果物を手に入れるのに自分の金髪ではなく、お金を払って果物を買おうとすると、ゴ布林たちはリジーが自分たちの思うようにならないので、「ひねくれている」とか「無礼」とか女の子らしくない性格を表わす言葉を並べて彼女をののしる。彼らにとって、自分たちの言うことを聞かない人間は女性ではないのである。そして髪を切って交換するという性的な意味での取引ではないので、ゴ布林たちは彼女に悪態をつき、無理やり果物を食べさせようとするが、彼女は一滴の果汁すら口に入れまいとして、唇を固く閉ざし、ゴ布林たちの暴力にも毅然と抵抗する。そのときの彼女の姿は白いユリの花のようである。

White and golden Lizzie stood,  
 Like a lily in aflood,  
 Like a rock of blue-vein'd stone  
 Lash'd by tides obstreperously,  
 Like a beacon left alone  
 In a hoary roaring sea,  
 Sending up a golden fire, (408-414)

彼女はものすごい抵抗をしてゴブリンたちを打ち負かし、彼らの暴力で傷だらけになった身体に果汁を一杯つけて家に帰り、ローラにそれを吸わせる。

Come and kiss me.  
 Never mind my bruises,  
 Hug me, kiss me, suck my juices  
 Squeez'd from goblin fruits for you,  
 Goblin pulp and goblin dew.  
 Eat me, drink me, love me; (466-471)

ローラはゴブリンの果物の果汁を飲むが、今度はそれは解毒剤の役目を果たした。聖書にあるようにこの果汁は口には蜜のように甘かったが、食べてしまうと腹には苦いものだった。(黙示録、10章、10節)彼女の解毒への反応は以前の果物に対する飽くことのない食欲と同じくらい激しいものであるが、解毒が一度作用すると、体の中の大変動によって意識を失い、昏睡状態に陥る。ローラは生と死の狭間をうろつき、その間は二人とも昼と夜を見失うという朦朧とした状態になったが、ローラはリジーの寝ずの番によって回復する。暗い夜が明けて、さわやかな朝が訪れ、早起きの刈人が黄金の麦畑に出てくると、彼女は夢から覚めたように意識を取り戻し、笑い声を上げる。このように自然と人間を含む日常に目覚め、彼女の衰退した肉体は回復する。<sup>7</sup>ローラは果物をゴブリンを通してではなく、リジーを通して飲むと、それによってカタルシスを起こし、ゴブリンの呪縛から解かれたのである。その後、ローラもリジーも結婚して妻になり、母親になった時の姿が描き出されている。ローラは子どもに若い時、リジーが自分をゴブリンから助けてくれたことを話し、彼女は“there is no friend like a sister” (562)「姉妹にまさる友はいない。」とわが子に語るののである。

「ゴブリン・マーケット」の根底には聖書から取られた話が散りばめられている。もちろん、これは聖書の創世記でイヴがヘビに誘惑されて、善悪を知る禁断の木の実を食べたために原罪を

犯し、エデンの園からアダムとともに追放された話が下敷きになっている。売するためにゴブリンが名を呼ぶ果物の筆頭にあげたものが原罪のシンボルであるりんごであることからゴブリンの誘惑に負けて、禁断の果物を食べたローラがイヴの役割を果たしていることは明らかであり、このことはこの詩はローラがイノセンス、経験、墮落を経ていく話であることを匂わせている。さらに、これは不品行な女に贅沢な商品売って富を築いた地上の商人と、消えてうせてしまっ二度と口にすることが出来ないおいしい熟した果物が出てくる話（ヨハネの黙示録、18章11-14節）からもヒントを得ていて、ゴブリン商人を悪をもたらした地上の商人になぞらえている。結局、ローラはリジーに救われるので、この詩は罪、禁欲、贖罪のパターンの物語のように見える。

しかし、この作品はこれまでの聖書に対する伝統的な考えからは、かなり逸脱した物語になっている。知恵の実を食べたイヴになぞらえたローラには罪の意識はまったくないし、ロセッティの作品ではどれもイヴは悪い誘惑者として表わされていない。そして、救済される者と救済する者の関係があいまいであり、そこにこの作品の重要な意味があると思われる。創世記ではアダムとイヴは禁断の実を食べた後、墮落した後、罰のひとつとして命の木に近づくことが許されず、追放されるが、ロセッティは知恵の木の実と命の木の実の区別をあいまいにしている。<sup>8</sup> ロセッティの詩では、ローラが再び食べようと思っても、近づけない果実はもともと、彼女に禁じられたのと同じ果実である。さらにローラの救済は禁じられた果実のジュースを再び味わうことによつてなされたのである。最初はその実は彼女に飽くことのない食欲を与えたが、今度はその実は解毒剤の役割を果たした。つまり、ローラにとって知恵の木の実と命の木の実は同じ源から発している、清純さと罪との間の区別をあいまいにしている。聖書ではキリストは善の実は悪の実を実らすことは出来ないと言っている（マタイ伝、7章18節）が、この詩ではローラを墮落させた実も、救済した実も源は同じで、ここでは善の実も悪の実も同じものと言える。

この「ゴブリン・マーケット」の話はロセッティがボランティアで外部シスターとして働いた修道院の婦人更生施設で出会った墮落した女性たちのことを念頭において書かれたと言われているが、その決定的な違いは施設に入っていた女性たちは皆、罪で苦しんでいたのに、ローラは恥も罪悪感もなく、道徳的に自分の行動が間違っていたという意識が彼女にはないことである。彼女が苦しんでいるのは罪悪感のためではなく、再び果物を食べられず、また恋しいゴブリンにも会えないためである。この詩は快楽を慎むのが良いことで、快楽を味わうことが罪悪だと単純に善と悪を対照させているわけではないので、ただ単にこれを贖罪のメッセージとして見ることはできない。ローラは好奇心が強く、欲張りであるが、リジーは理性的であり、村の言い伝えやうわさ、親の考えなど既存社会の意見、つまり社会の良識の声を代弁している。ローラは叙事詩のヒーローのように自分でものを見つけ出し、欲しいものを手に入れようとする。リジーは自分のために行動するよりも、毅然として、勇敢にも他の人のために行動する。これはどちらが善でどちらが悪とかいう問題ではない。従って、ローラがゴブリンと会って、果物を食べた後、家に帰



って来ても、ローラとリジーの親密さには変わりなく、むしろ二人の中の良さが強調される。

Golden head by golden head,  
 Like two pigeons in one nest  
 Folded in each other's wings,  
 They lay down in their curtain'd bed:  
 Like two blossoms on one stem,  
 Like two flakes of new-fall'n snow, (184-189)

二つの金髪の頭を寄せ合って、ひとつのベッドに抱きあうように寝るローラとリジーの姿は、ひとつの巣にこもる二羽の鳩や1本の枝に咲く二輪の花に例えられていて、二人の仲むつまじさが強く印象づけられている。伝統的な救済のレトリックでよく見られるように、二人の対照性が引き立てられることはなく、むしろ二人の精神的な絆の強さが強調される。つまり救済する聖なる者と救済される墮落した者の間によく見られるような不和はなく、双方は精神的にも道徳的にも平等な関係を維持している。すなわちこれは墮落した人間の魂を救うという問題ではなく、一度墮落した人間が共同社会に復帰するために必要な救済の問題だと言える。

当時のイギリスでは女性は男性と同じ教育を与えられなかったが、それは多くの知的活動は生殖器官をうまく発達させないと信じられていたからで、性愛と教育の面で女性は二重に制約を受けていた。そのことから、イヴが食べたのは善と悪を知る知恵の木の実だったが、ローラがゴブリンの禁断の果物を食べたということには性的な意味があるとか、また男性と同等に知識を得ることを意味することだとか言われている。しかし、もっと大局的に考えると、ゴブリンの果物は女性の持つあらゆる種類の願望とも解釈される。つまり、社会から制約を受けて、女性には手の届かない願望をローラが手に入れようとして、境界線を越えたと考えてもよい。ローラは進んで、その境界を越えようとするが、リジーはいやいやであるが、結果的には越えてしまった。その動機が何であれ、二人とも女性が社会から課せられた制約を象徴する境界線を越えたことには変わらない。つまりここでロセッティは聖書の物語を用いて姉妹に境界線を越えさせ、男性社会に接するようにして女性に多くの制約を与えていた社会の女性分離のイデオロギーを破壊しようとしたのである。そして、熱心なキリスト教徒であるロセッティは社会が女性に与えた制約は神の教えとは調和しないことを示し、ローラの社会への回復をキリストと天に託したと言える。そのことはリジーが変わらぬ姉妹愛によって、ローラを救って受け入れることによって示されている。<sup>9</sup>

ロセッティが当時の社会の因襲に対して批判的であること、また社会のアウトサイダーに対して寛容であるという事実は重要なことである。つまり、キリスト教において彼女は審判よりもむしろ、受諾のイデオロギーを重要視していたと言ってよい。彼女は1860から70年にかけて修道院

の婦人更生施設 the Highgate House of Charity で外部シスターとして、身を持ち崩した女性たちを更生し、家庭に戻そうとすることを試みた。彼女は墮落した女性は永遠に社会的にアウトサイダーである必要はないと信じていたのである。「ゴブリン・マーケット」の最後にはローラとリジーは二人とも、普通の生活を送る品位ある妻として、また母として描かれている。墮落した女性の精神状態を描くこともロセッティには重要だが、それと同じくらい彼女たちに対する社会的受容の仕方にも大きな関心がある。ロセッティは墮落した女性は単に罪人とか娼婦というだけでなく、愛すべき女性の仲間“sisters”であるということを信条として彼女たちの社会的受容を提唱したのである。しかし、現実の社会は一度墮落した女性を中々受け入れようとしないことに彼女は心を痛めた。そこで、リジーがローラを受け入れたように、墮落した女性が矯正された後、再び社会に復帰した時に彼女たちを追放しないで、暖かく迎えてくれるように「ゴブリン・マーケット」を書くことによって、彼女は社会にメッセージを送ったと言っても良い。ロセッティは彼女たちに社会の犠牲者として屈服しないで、アウトサイダーとしてでも、凶たく生き残るように提唱している。

ロセッティのフェミニズムを考える時、彼女のキリスト教への思いを忘れてはならない。リジーがローラを救うためにゴブリンと戦った時の彼女はユリの花とか、岩、灯台に例えられている(9-12)が、ユリは聖母マリアの純潔を表わし、岩は安定を、灯台は光を暗示し、これらのイメージはしばしば、キリストあるいは教会を連想させる。<sup>10</sup> さらに、ゴブリンとの対決後、リジーは家に急いで戻って、ローラにゴブリンから奪ってきた果物の果汁を飲ませようとして、“Eat me, drink me, love me” (471) と言うが、それはキリストが最後の晩餐の時に言った言葉を思い出させる。聖書において自己犠牲の精神の純粹さは女性が持つべき資質とされていたが、贖罪とか創造という主体的な行為は男性のすべきことだと考えられていて、女性がする行為とは思われていなかった。当時は女性はあくまでも、男性のすることを助ける補助的な役割しか与えられなかったのである。しかし、ロセッティはリジーにキリストの役割をさせることによって、ヒロインではなく、ヒーローの役割をさせていると言える。すなわち、ロセッティは女性にキリストの働きをさせることで、女性を劣ったものと見なし、精神的に女性を男性と同等に扱うことを無視したヴィクトリア朝社会に対して、厳しい挑戦状を突きつけたといってもよい。当時のイギリス社会は女性には道徳の導き手として、外で働く男性を支えるために優しさや忍耐をもって、家庭を清らかにする天使であるべきだという役割を規定した。従って、ヴィクトリア朝の文学や美術では、ゴブリンが出没する谷間に勇敢にも入っていくキリストのような救世主の役割を女性が果たすように描いた例はない。<sup>11</sup>

詩の初めの場面で、ゴブリンたちが呼びかけた「買いに来な、買いに来な」という言葉に代わって、最後の場面はローラがわが子に「姉妹にまさる友はいない」と語っている。ことわざや聖書では賢い男性が息子に話をするというのが一般的だが、ロセッティは一般に予測される男性の

声の代わりに女性の声で終わらせている。つまり、この詩では、聖書の中で男性の友情について語る時に用いられるような高尚な言葉を使って、女性が女性の友情、姉妹愛について女性の声で語ったのである。ヴィクトリア朝の女性が体現することになっていた自己犠牲愛は天使ではなく、キリストなる女性によって行動として示され、キリストが行なう救済の役割を女性が果たしたのである。つまり、女性は「家庭の天使」よりも、もっとレベルの高い精神的な生活と行動をすることが出来ることを身をもってリジーが示したと言える。そして姉妹愛を讃えることによって、ロセッティは聖書で語られる兄弟愛というものの中に姉妹愛をも含むべきであると示唆していて最後のシーンでは母が子に抱く母性愛ではなく、姉妹愛を讃えていることは意義深く、彼女は女性の連帯の重要性を印象づけようとしていたのである。<sup>12</sup>

## 終わりに

ロセッティは「ゴブリン・マーケット」の中で、創世記に出てくるイヴの話の題材に用いたけれども、禁断の木の実を食べた墮落した女性の贖罪の問題を扱ったというよりも、むしろヴィクトリア時代の女性の問題を描こうとしたと考えた方が理にかなっている。彼女は資本主義の勃興に伴って生まれた男性と女性の活動分野の分離や女性は男性に比べて生まれつき体力や知性が無いなどという女性に対して抱かれていた一般の偏見や男女の不平等に対して、怒りを感じていた。このようにヴィクトリア朝の女性を抑圧した家父長制的なシステムに疑念を差しはさんでいたロセッティはそれらの思いを作品の中で伝えたかったのであろう。また、特に都市化に伴って起こった売春婦の増加などに彼女は危惧を感じていただけではなく、ジーニーのような墮落した女性からリジーやローラなどの普通の妻や母まであらゆる階級の女性を脅かす男性への従属を強いる家父長制社会の自己破壊的側面について警告を発したかったのである。さらに、彼女は結婚というものに対しても疑問を投げかけ、当時多くあった愛のない打算的な結婚を皮肉な目で見ていた。彼女の目にはある意味で、結婚は女性の経済的独立、自由選択などを限定するものと映ったのである。

このように、ロセッティは家父長制社会のもとで、女性が抑圧されていたことに対して怒りを感じ、不平等な社会に対して文学を通して抗議のメッセージを送ったと考えられるが、19世紀半ばに社会をにぎわした女性の生き方について起こった論争である「婦人問題」(The Woman Question) に対するロセッティの態度を考えると、彼女の思想は矛盾しているように見える。ロセッティは兄のゲイブリエルを通して、ランガム・ブレース・グループと接触があったが、結局、グループの信条とは合わず、一線を画した。ランガム・ブレース・グループはロセッティが活動に参加していた修道会の慈善団体とは違う方向に改革路線を取っていったからである。グループは神から与えられた男性の権利を女性にも平等に与えるべきであると主張し、女性参政権運動を組織するようになった。そのグループはロセッティが所属していた慈善団体と関係のある福

音主義の改革者の影響を受けたが、結局、福音主義とは考え方が違う方向に向かっていった。福音主義者とランガム・プレス・グループの理論的な大きな違いは女性の力の大きな原動力として福音主義者たちは「自己否定」という教義を重要な信条にしていたが、グループはそれには反対していたことである。<sup>13</sup>ランガム・プレス・グループは男女平等ということ合理的に考えて、慎み深く上品な福音主義の教義に制限されることなく、その要求を公の政治的な場で人びとに知らせる必要があると考えていた。しかし、ロセッティの政治活動はいつも宗教が根底にあり、彼女の信仰と多くの民主的な改革は合致していたが、「婦人問題」が起こってくると、信仰との関係において、彼女の中で矛盾するものがあった。反物質主義、反階級制などの問題などは彼女の信仰に合致していたが、彼女は女性の高等教育や参政権を求める運動に参加することを断った。さらに、それだけではなく、1889年には婦人参政権に反対する女性たちの請願書に署名することさえもしたのである。

信仰以外のことには一切、目を向けなかった彼女は地上の一時的な報酬よりもむしろ、天の永遠的な報酬を求めたのであろう。ロセッティの目的はこの地上の人間が営む社会に対して、男女平等でないなどと抗議して地上の報酬を得て、現世での幸福を手に入れるのではなく、来世の神のもとでの永遠の安らぎを彼女は期待していたのかもしれない。しかし、そうであったとしても、「ゴブリン・マーケット」が当時の男性優位の社会に対して、警告を発したことに変わりはない。

#### 【注】

- 1) 岡田忠軒「純愛の詩人——クリスチナ・ロセッティ」(南雲堂, 1991), p.118.
- 2) Christina G. Rossetti, "Goblin Market", *The complete Poems of Christina Rossetti* (London; Penguin, 2001) pp.5-20. 以後「ゴブリン・マーケット」の引用については、行数を引用箇所後に付す。
- 3) D.M.R. Bentley, "The Meretricious and the Meritorious in Goblin Market: A Conjecture and an Analysis", *The Achievement of Christina Rossetti*, ed. by David A. Kent (Ithaca; Cornell University Press, 1987) p.66.
- 4) Sharon Leder and Andrea Abbot, *The Language of Exclusion: the Poetry of Emily Dickinson and Christina Rossetti* (New York: Greenwood Press, 1987), p.119.
- 5) Dolores Rosenblum, *Christina Rossetti: the Poetry of Endurance* (Dolores: Southern Illinois University Press, 1986), p.73.
- 6) Leder and Abbot, p.125.
- 7) Rosenblum, p.82.
- 8) Lesa Scholl, "Fallen or Forbidden: Rosetti's *Goblin Market*", p.2. (23 Dec. 2003) Online. Internet. The Victorian Web. 17 Jan. 2004.

- 9) Scholl, p.6.
- 10) Daine D'Amico, *Christina Rossetti: Faith and Gender and Time* (Boston; Louisiana State U. P., 1999), pp.74-75.
- 11) D'Amico, p.76.
- 12) D'Amico, pp.81-83.
- 13) Leder and Abbot. pp.80-81.